

小学校 音楽科 部会

部会長名 添田町立津野小学校 校長 中野 寿
実践者名 大任町立大任小学校 教諭 山口由一郎

1 研究主題

音楽的な感性を働かせ、他者と協働しながら音楽の学びを深める児童の育成
～音楽の気づきを伝え合う交流活動を位置付けた活動構成の工夫～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

これからの時代、子どもたちが大人になって直面する課題は、困難で厳しいものが多い。例えば、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、働く相手や働き方そのものが変化するため、他者と主体的に関わるためのコミュニケーションの能力だけでなく、目的を共有し、互いの発想や考えを組合せて新たな価値を生み出すことができる協働性や創造性を併せもつことが重要になってくる。また、知識はあっても活用の仕方を間違えれば、社会にとってマイナスになることもある。つまり、持続可能な社会にとって必要となる正しさやよさの判断をこの複雑な状況変化の中で見極めていくことが必要になってくる。このとき、重要になってくるものが感性である。様々な状況を考えて上で正しさやよさを判断するためには、知識を再構成するだけでなく、美しいものを美しい、よいものをよいとする感性を豊かに働かせることが重要で、そうすることで人間としての最適解を判断できるようになると考えられる。中央教育審議会答申においても「予測困難な社会の変化に主体的にかかわり、感性を豊かに働かせながらどのような未来をつくっていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と述べられている。つまり、感性の働きが、今後ますます課題解決のための新たな発想やよりよく生きる上での新たなものの見方を生み出す原動力として重要視されると考えられる。さらに、共通の目的に向かって様々な感性をもつ他者が関わり合うことによって、よりスピーディーに、それでいて質の高い新たな価値を生み出すことになる。このような協働性や創造性は、音楽科における表現及び鑑賞の活動の中の「よりよい表現を生み出す学習」や「曲や演奏のよさを見出す学習」を通して身に付けることができるものである。また、表現に対する思いや意図を交流していくことは、個々の感性が互いに刺激し合い、新たな創造性を発揮することにつながっていく。このように、音楽的な感性を働かせ、他者と協働しながら音楽の学びを深める児童を育成していくことは、「生きる力」を育てていく上で大変意義深い。

(2) 音楽科教育の課題から

今回の学習指導要領改訂にあたっての中央教育審議会答申においては、音楽科の課題として次のことが示された。

・感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わ

えるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、さらなる充実が求められるところである。

これまでの音楽科の授業においても、一斉指導の中で音楽表現を楽しむ姿は数多く見られた。しかし、音楽科におけるよさや面白さは、思いや意図をもって表現することと技能を高めることの両輪を関連させることで実感できるものであり、一人一人の子どもが自らの考えをもって音楽にかかわろうとすることが大切である。つまり、音楽の要素とイメージの関わりを、子どもたちが自ら気づき、思いや意図をもって表現をよりよいものにしていくような授業である。具体的には、例えば、打楽器による音楽づくりをするときに、友達と互いに鳴らし方を検討し合う中で、新たな音色の鳴らし方に気付いたり、木質系の打楽器だけで演奏したグループの音楽から、「全員金属系の打楽器にしたらどんな音楽になるだろう。」という新たな思いや意図をもったりするような、音楽の気づきからかわりを深めていくような授業である。今後、そのような授業の必要性から本主題を設定した。

(3) 児童の実態から

本校の児童は、音楽を日常生活の中でもよく聴いている。テレビやインターネットを通して、自分が好きな音楽を探したり、繰り返し聴いたりしている。聴いている音楽の多くがテンポが速く、リズムが強調されたものが多い。また、歌詞の内容を意識せずに聴いたり、口ずさんだりしている。さらに、子どもたちに身近な映画やCM、アニメーションなどの音楽は、ムードを盛り上げるためや感情移入させるための制作側の意図が明確で、時に、楽曲が本来もつ背景と関係のない場面で使われることもある。このような傾向は、本来、歌が詩にのせて思いを伝えているよさやイメージを広げながら音楽を聴く楽しさに気付くことなく、感覚的に音楽を聴いている状態であると考えられる。このような聴き方では、曲に対するイメージをもったり、思考力や判断力を働かせ音楽のよさを味わったりすることは難しい。このことから、子どもがもっと音楽に親しむことができるようにするためには、感性を働かせてイメージと音楽の関わりによさや面白さ、美しさを感じ取ることや互いの見方・考え方を通して様々な音楽の楽しみ方を見出すなどの学習を取り入れていくことが必要であると考えられる。

3 主題の意味

「音楽的な感性」とは、音楽的な刺激に対する反応、音や音楽の美しさなどを感じ取るときの心の働きのことである。具体的には、音楽を感覚的に受容して得られるリズム感、旋律感、和音感、強弱感、速度感、音色感などである。これらを通して音楽が美しい、すばらしいと感じるものである。この感性は美しい物や崇高なものに感動する心を育てるのに欠かせないものである。そして、多様な美しさをもった様々な音や音楽を尊重する心にもつながるものである。

「音楽的な感性を働かせる」とは、ある音楽において自分のイメージや感情と音楽を形作っている要素との関わりについて主体的に考えることである。具体的には、堂々とした音楽と直観的に感じ取ったものが、ゆったりと歩く速さで、低い音がズンズンと鳴っているからという速度や音の高さである要素を根拠として、曲想が表れていることを実感している状態のことである。このことは「音楽的な見方・考え方を働かせているこ

と」と同義である。

「他者と協働しながら音楽の学びを深める」とは、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図りながら、この思いや意図を実際に音を出しながら試行錯誤し、共有した思いや意図に高めて音楽表現をしたり、曲想と音楽を形づくる要素とのかかわりを考え、互いの見方・考え方のよさや面白さを感じ取りながら曲や演奏の全体を通して音楽を聴いたりする姿のことである。

つまり、「音楽的な感性を働かせ、他者と協働しながら音楽の学びを深める児童」とは、音楽的な見方・考え方を働かせて、互いの見方・考え方のよさを実際の音や音楽を通して実感し、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わろうとする児童のことである。

4 副主題の意味

音楽科における「気付き」とは、表現や鑑賞の学習において曲想と音楽を形づくる要素とのかかわりについて考え、そのよさや面白さを知覚・感受することである。一単位時間の中に3つの気付きがあるとよいと考える。1つは、「表現の工夫の観点や鑑賞曲の印象にかかわる気付き」である。この気付きは、一単位時間における学びの問いや見通しにかかわるものである。2つは、「音楽を通じて見通しが確かだったか試行錯誤する中で発見したり、修正、強化したりする気付き」である。この気付きは、音楽活動を十分に取り入れ、友だちとのかかわりの中で言葉と音楽によるコミュニケーションの往還の中で生まれてくるものである。3つは、「音や音楽のよさや面白さ、美しさへの気付き」である。音楽のよさや面白さ、美しさに気づくことが、本研究主題にも挙げている学びを深めた姿であると考えられる。

「音楽の気付きを伝え合う交流活動」とは、子どもが知覚・感受したよさや、面白さ、美しさを他者と伝え合うことで学びを深めることである。個人では一面的な見方であっても、さまざまな見方を知ることによって、音楽へのかかわり方が広く、深くなっていく。また、短い時間の中でも効果的な深い学びが期待できる。このような交流活動を一単位時間の中に適切に位置付ければ、音楽の学びが深まり、音楽を愛好する心情を養うことにつながっていくと考える。

5 研究の目標

音楽的な感性を働かせ、他者と協働しながら音楽の学びを深める児童を育成する。

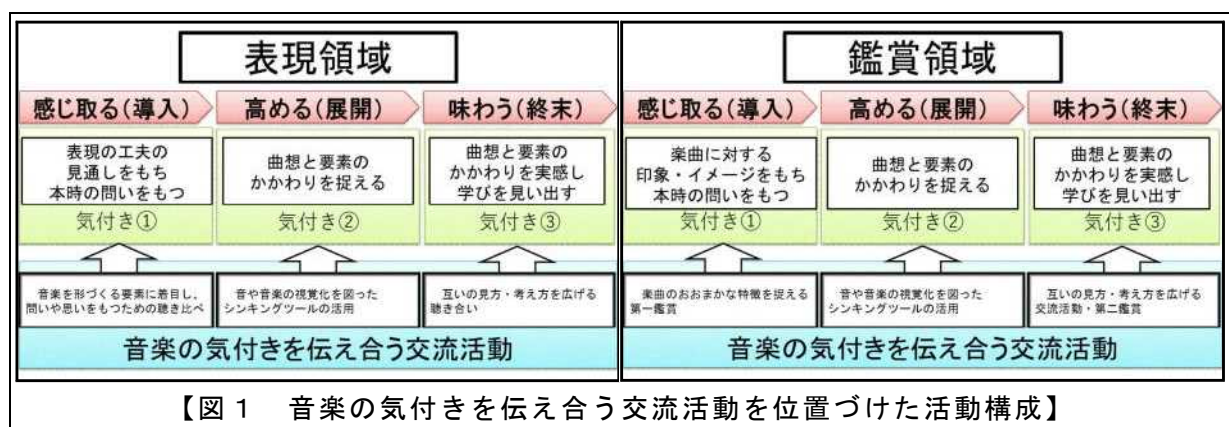
6 研究仮説

音楽の気付きを伝え合う交流活動を位置付けた活動構成の工夫を行えば、音楽的な感性を働かせ、他者と協働しながら音楽の学びを深める児童が育つであろう。

7 研究仮説の着眼

音楽の気付きを伝え合う交流活動を位置付けた活動構成は、具体的には以下の3つの工夫を取り入れ、各学習段階に適切に位置付けること（図1）が必要であると考えられる。

- | | |
|------------------------------|---------|
| ① 音楽を形づくる要素の焦点化を図る聴き比べる活動の設定 | 【交流活動①】 |
| ② 音や音楽の視覚化を図ったシンキングツールの活用 | 【交流活動②】 |



① 音楽を形づくる要素に着目し、問いや思いをもつための聴き比べる活動(第一鑑賞)の設定

この活動は一単位時間の導入部において設定する活動である。複数の要素の中から着目させたい要素を引き出し学習に向かう問いや思いをもたせるために聴き比べを行う。具体的には、着目させたい要素が速度であるとすれば、速度が違うことによって曲想が違って感じられる音楽を2つ準備し、比較して聴く。感じ取ることやイメージが違ってくるため、そこに気づきが生まれ、学習に主体性をもたせることにつながる。

② 音や音楽の視覚化を図ったシンキングツールの活用

子どもたちが主体的に曲想と要素とのかかわりを考えることができるようにシンキングツールを準備する。シンキングツールは、情報を整理・分析する上で効果的である。表現領域においては表現の工夫を可視化の機能や試行錯誤できるようにする機能がある。工夫するカード等はマグネットで自由に操作できるようにし、自分たちが目指す表現を伝え合うときにも効果的であり、音楽の全体像を捉えることができる。また、旋律の組み合わせ方やどのような構成の音楽をつくっていくかの観点を示す時にも有効であり、これにより児童たちは主体的に考え、対話も自然と行われる。また、鑑賞領域においては、楽曲の構成を示し、その部分ごとに「感じ取ったことやイメージ」と「音楽を形づくる要素」をつないで捉えることができるような「対応・対比」の視覚化を図っていけるシンキングツールに工夫する。

③ 互いの見方・考え方を広げる聴き合い活動(第二鑑賞)の設定

表現領域においては、音楽と要素のかかわりを実感するために、自分たちが表現した音楽を聴き合う活動を設定する。客観的に要素と曲想とのかかわりを感じ取ることができるように、2つのグループに分かれて聴き合ったり、グループごとに発表したりする。聴いて感じ取った音楽的なよさや面白さを実感できるように、体験するための表現の時間も設定する。同じ要素でも曲想の感じ取り方が違えば、音楽に対する見方・考え方が広がり、その曲の楽しみ方や味わいが深まってくる。

鑑賞領域においては、第一鑑賞の時と比べて、新たな見方・考え方が加わることによって、今まで聴こえてこなかった音が聴こえてきたり、新たに聴こえた音によって楽曲のよさや美しさが味わい深いものになっていくことをねらうために、楽曲全体を通して聴く第二鑑賞と、もった感想について、全体交流や児童の相互評価を設定する。

8 研究の計画（授業の計画）

(1) 題材「いろいろな音のひびきを感じ取ろう」

(2) 題材の目標及び指導計画

題 材	いろいろな音のひびきを感じ取ろう	総時数	10時間	時期	11月	
題材の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 楽器の音の特徴や音色の違い、旋律の特徴を感じ取りながら進んで聴いたり、互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴きながら音を合わせて演奏したりする。(関心・意欲・態度) ○ 打楽器の音の特徴や音色、旋律の特徴、反復や変化などを聴き取り、その特徴や違いを感じ取りながら、音の響きの組み合わせや音楽の仕組みを工夫している。(感受・表現の工夫) ○ 楽器の音色の違いや反復や変化などの音楽の仕組みを生かして音楽をつくったり、各パートの音のバランスを考えてよりよい音の響き合いになるように合奏をしたりすることができる。(表現の技能) ○ 楽器の材質による音色の特徴や主旋律や副旋律などの旋律の特徴、反復や変化などの音楽の仕組みとの関わりから音楽のよさや面白さが生まれることを理解して聴いている。(鑑賞の能力) 					
次 時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点(援助・支援)			
一	1	◎ 歌と楽器が問いと答えになっている面白さや様々な音色が順番に鳴る面白さを感じ取りながら歌ったり、リズム打ちをしたりしている。	1 曲「音のカーニバル」を歌と合わせて楽器を演奏する。 (1) 曲「音のカーニバル」の範唱CDを聴いて、リズムを打ちながら歌う。 ○ 歌とリズムの掛け合いの楽しさを感じ取ること	○ 拍の流れによってリズム打ちをするために、ドンやタンなどのオノマトペで言わせる。		
	2	◎ 楽器の材質による音色の違いや音高や響きの長さの違いを感じ取りながら拍の流れに乗って演奏している。	(2) 楽器の組み合わせや、演奏する順番を工夫して演奏する。 <u>(実践1)</u> ○ 材質による音の響きの違いのよさや面白さを感じ取ること	○ 材質による音の響きの特徴や音高の違いによるよさや面白さを感じ取るために、グループでつないで演奏させる。		
	1	◎ 材質による音色の違いや音高や響きの長さの違いを鳴らし方を即興的に工夫しながらお気に入りの	1 打楽器の音楽をつくる。 (1) いろいろな楽器を使って、4つのカードの図形を音で表す。 ○ 即興的に表現しながら、自分が気に入る音	○ 鳴らし方で音の響きが変わることや同じリズムを反復すると音楽に聞こえてくる面白さに気づかせるために、4つのカー		

二	<p>音を見つけることができる。</p> <p>2 ◎ お気に入りの音が互いに際立つように、鳴らし方や鳴らす順番をグループで工夫して音楽をつくることができる。</p> <p>3 ◎ 「はじめ、中、終わり」の構成を意識して、音楽の仕組みを工夫して、音色の変化が楽しい自分たちの音楽をつくることができる。</p> <p>4 ◎ 音楽の仕組みや鳴らし方の工夫による音色の違いから表れる曲想を味わいながら聴こうとしている。</p>	<p>の響きを見つけること</p> <p>(2) 楽器の組み合わせを工夫して音楽をつくる。</p> <p>○ 材質の特徴を生かした組み合わせを工夫すること</p> <p>(3) まとまりのある打楽器の音楽をつくる。</p> <p>(実践2)</p> <p>○ 音の重ね方、反復や変化を生かして、楽しい音楽をつくること</p> <p>2 鑑賞曲「和太鼓の音楽」を聴き、気づいたことを話し合う。</p> <p>○ 反復や変化など音楽の仕組みに気づいたり、同じ楽器でも打ち方の違いで音の響きが変わることのよさや面白さを感じ取ったりして聴くこと</p>	<p>ドを提示したり、ペアでの交互奏を取り入れる。</p> <p>○ 材質をそろえて音色の特徴をそろえたり、異なる材質を組み合わせる音色を際立たせたりする生かし方に気づかせるために、同素材と異素材の音色の比較をする。</p> <p>○ 音色、リズム、組み合わせの変化によって、まとまりのある音楽になることを理解するために、構成シートで視覚化を図る。</p> <p>○ 音楽の仕組みや音の響きの違いで曲想が表されている面白さを感じ取りながら聴くことができるように、和太鼓の様々な演奏方法を知らせたり、基本リズムを手打ちさせたりする。</p>
三	<p>1 ◎ 主旋律を、リコーダーで演奏することができる。</p> <p>2 ◎ 和音や低音の響きのよさを感じ取り、主旋律と合わせながら、副次的な旋律を演奏することができる。</p> <p>3 ◎ 全体のバランスを</p>	<p>1 曲「茶色の小びん」の合奏をする。</p> <p>(1) 主な旋律を演奏する。</p> <p>○ ハ長調の楽譜を見たりして演奏すること</p> <p>(2) 副次的な旋律、和音、低音パートを演奏する。</p> <p>○ 旋律の特徴や音色に気をつけて、旋律楽器を演奏すること</p> <p>(3) 各パートの音量のバ</p>	<p>○ 同じ音型が反復する部分に気づかせるために、拡大楽譜を提示したり、範奏CDを聴かせたりする。</p> <p>○ 旋律の特徴や音色の違いを感じ取らせるために、主な旋律と副次的な旋律を同じ楽器で演奏したり、違う楽器で演奏したりする。</p> <p>○ 各パートのバランスを</p>

	<p>聴きながら、強弱や鳴らし方を工夫して、演奏することができる。</p>	<p>ランスに気をつけて合奏する。② ○ 互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴いて音を合わせて演奏すること</p>	<p>考えて合奏できるように、録音して、気づいたことを話し合わせる。</p>
--	---------------------------------------	--	--

9 指導の実際

(1) 実践1 (第一次 第2時)

前時は、曲「歌のカーニバル」に出合い、歌と楽器が問いと答えになっているところや楽器の部分が様々な音色が順番に1拍ずつ鳴るところに面白さを感じていた。そこで、大太鼓、小太鼓、シンバル、ウッドブロック、カスタネット、トライアングル、クラベス、鈴を提示し、鳴らし方による音色の違いについて体験したり、聴き合ったりした。材質によって音色の違いを感じ取った子どもたちは、「自分たちも色々な楽器を順番を工夫して演奏してみたい。」という次時の見通しをもった。そこで、本時は、楽器の材質による音色の違いや音高、響きの長さの違いを感じ取りながら拍の流れに乗って演奏することをねらいとした。そこで、材質による音の響きの特徴や音高の違いによるよさや面白さを感じ取るために、グループでつないで演奏する活動を設定した。

まず、導入段階では、本時の問いをもつために、材質の違いによる音色の違いを想起させた。その際、曲「音のカーニバル」の器楽部分の4つの音を木質楽器のみの場合と金属楽器のみの場合の聴き比べを行った。子どもたちは、「木のほうが音があたたかい」「金属が響きが長いので面白い」など材質による音色の違いを感じ取っていた。また、「同じトライアングルでも鳴らし方を変えると面白そう」と工夫の見通しをもつ子どももいた。この発言から、「木質と金属を交互に鳴らしたら、どのように聴こえるだろうか。」「どんな順番でどんな楽器を鳴らしたら面白そうかやってみよう。」という本時の問いにつながった。このことから、曲と同じリズムで木質楽器と金属楽器の聴き比べを行ったことは有効であったと考える。また、気付いたことを音や言語を通して交流する活動を設定したことで、複数の問いが生まれ、活動の見通しにもつながった。

次に、展開段階では、曲想と要素のかかわりを捉えるために、音色の違いや響きの長さの違いを工夫して、4人1グループで順番に鳴らす活動を行った。その際、前時学習で見つけたお気に入りの音色を図化したものをもとに順番を決める交流活動を設定した。1つのグループの交流は、「大太鼓が響きが長いし音が低いので最後に鳴らそう。」というところから始まり、その考えに対し「それなら、高い音からだんだん低い音にしてはどうか。」という考えを提案していた。このグループは、シンバル→小太鼓→ウッドブロック→大太鼓の順番に決まった。このように、音高や響きの長さに着目して順番を決めたグループもあれば、思いつきで順番を決めたグループもあった。このことから、4人1グループで順番に鳴らす活動は有効であったが、曲想と要素のかかわりを捉えるところは不十分だった。改善策としては、音色を図化したもの

を音高や響きの長さが目で見て分かるように「長さ・高さ」の指標を表す工夫や材質ごとに色分けしたカードを準備するなどして、話し合いの観点を明確に示すとよいと考える。

そして、終末段階では、楽器の材質による音色の違いや音高や響きの長さの違いを感じ取りながら演奏するために、グループで決めた演奏を聴き合い、互いの工夫のよさや面白さについて交流する活動を設定した。ここでは以下のような順番で鳴らすものが発表された。

順番	工夫点
Aグループ シンバル→小太鼓→ウッドブロック→大太鼓	音高をだんだん低くする。
Bグループ 小太鼓→カスタネット→大太鼓→シンバル	最後に響きが長いシンバルを鳴らす。
Cグループ カスタネット→クラベス→ウッドブロック→トライアングル（響き止める）	木質の楽器を鳴らした後、最後に金属の楽器を鳴らす。しかも、響かせるのではなく響きを止める。

AグループやBグループに見られた工夫は、響きが長い楽器で最後鳴らしているという共通点があった。また、複数の材質のものを取り入れていた。これらの鳴らし方は、聴く側としても最後の音に重きがあって、印象としては薄かったようである。最も多くの子どもに印象に残ったのがCグループだった。金属の音色のよさを際立たせるために、その前の楽器をすべて木質にしたことと、長く響くことが特徴であるトライアングルをあえて響きを止めたことによって聴く側に意外性を与えたことから多くの子どもによさや面白さを感じさせたようである。この新たな見方・考え方が子どもたちの感性を刺激し、「全部トライアングルでも鳴らし方を工夫したら面白くなる。」や「シンバルも最後響きを止めてみたらどうかな。」と新たな見方・考え方を見出すことができていた。このことから、演奏を聴き合い、互いのよさや面白さについて交流する活動は有効であったと考える。

(2) 実践2（第2次 第3時）

前時は、同じリズムをつなぐと音楽に聴こえてくる面白さを感じ取るために、4人でつないで演奏する活動を行った。そこでは、同じリズムでつなぐことで、それぞれの楽器がもつ音色の特徴が際立つことも感じ取っている。

まず、導入段階では、それぞれのお気に入りの音をグループでつないでいきたいという思いをもたせることをねらいとした。そのために、反復や変化、問いと答えのリズムを聴き比べる活動を行った。子どもは次のように考えを伝え合った（資料1）。

教師の働きかけ	児童・生徒の反応
【音楽の仕組みの聴き比べ】 T1：前の時間は、まねっこリズム（反復）をすると音楽に聴こえてきたね。つなぎかたには、あと2つ種類がありま	 C1（手拍子をして体験する。）

す。

【手拍子による要素の感受】

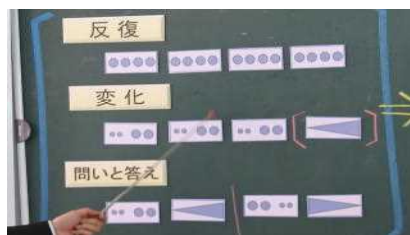
T 2 : 同じリズムから違うリズムに変わることを変化というよ。では、この3つの反復のあとにどんなカードを入れて変化させるかな。

T 3 : 反復と比べてどうですか。

【試しの演奏】

T 4 : 問いと答えをやってみましょう。最初になったリズムの反対のリズムで答えます。

T 5 : それでは、音楽の仕組みを工夫して音楽をつくってみましょう。



C 2 だんだん大きくなるカードを入れます。

C 3 変わったところが目立って面白い。

C 4 反復している間、どう聴こえるか待ち遠しい（楽しみ）。

C 5 別のでやってみたい。（2グループ試す。）



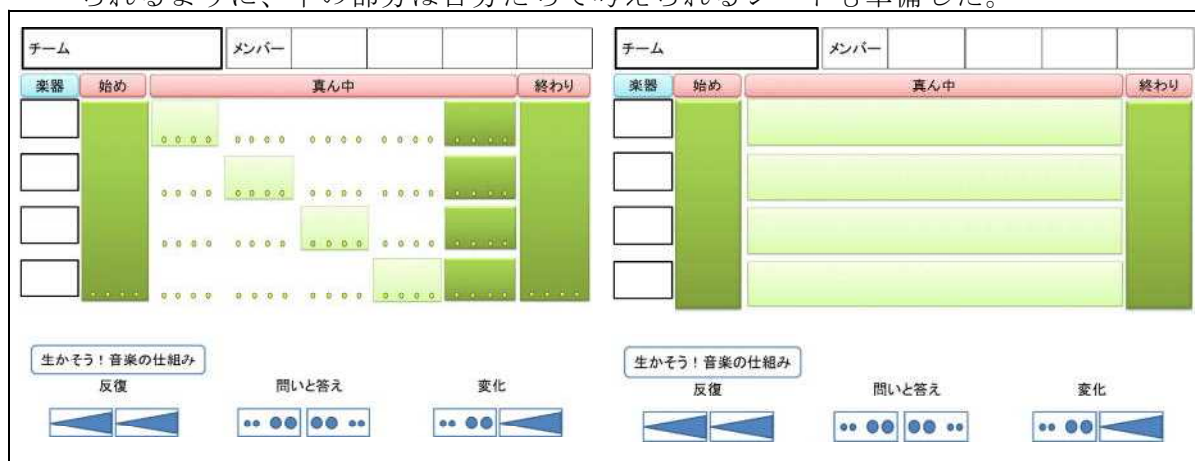
C 6 話をしているみたい。いろいろ試してみたいです。

【資料1 導入段階のTC表】

このことから、感じ取る段階の交流活動は、この段階では、それぞれのお気に入りの音をグループでつないでいきたいという思いをもたせる上で有効であったと考える。つなぐ観点に「反復」に加えて、「変化」、「問いと答え」という新たな2つの観点をもったことで発想を刺激することができていた。「変化」の観点では、繰り返されて音色が変化することに意識が向いていたものが、リズムも変化することによってより聴き入ることになる。その面白さから、前時でも活用していたリズムカードの種類のみだけ試してみたいという思いにつながった。「問いと答え」の観点では、まるで会話をしているような感じがし、「ウッドブロックから響きの長いトライアングルでつなぐと面白そう」、「同じ木の仲間通しでつなげばいい感じの音楽がつくれそう」など音色の特徴も生かしながら音楽をつくっていかうという発想をもつことができた。また、友達の考えを聴くことで「その反対なら…。」「同じ考えでも、別の音色にしてみたら…。」「トライアングル同士でも、響きを長くしたものと響きを止めたもので問いと答えをしてみたら…」など自分の思いをもつことにつながることができていた。

次に、展開段階では、「はじめ、中、終わり」の構成を意識しながら、音色の特徴と音楽の仕組みを関係づけて、試行錯誤しながら自分たちにとって楽しい音楽をつくることができることをねらいとした。そのために構成シートを使うことを通して音楽づくりを行う活動と、その間に他グループの音楽を聴く活動を設定した。音楽の視覚化を図るシンキングツールである構成シートは、「はじめ、中、終わり」の構成になっている。はじめの部分は4人全員で同じリズムを鳴らし、中は一人ずつ順番に鳴らした後、終わりにつなぐ1小節が4人が違うリズムで同時に鳴らし、終わりは4人全

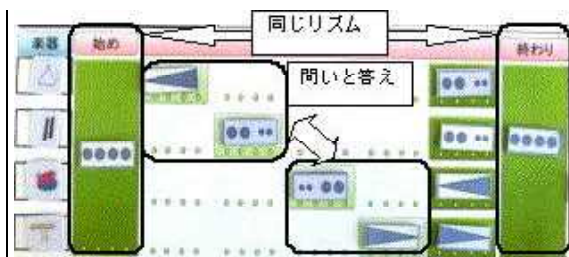
員で同じリズムを鳴らすように制限をかけた。また、子どもの自由な発想も受け入れられるように、中の部分は自分たちで考えられるシートも準備した。



【構成シート（左：中の部分制限有り 右：中の部分制限なし）】

さらに、構成シートは試行錯誤できるように、リズムカードをマグネットにして、操作ができるようにした。そして、音楽をつくる上で、カードを並べることに終始し、音色のよさや面白さを聴くことが不十分にならないように、段ボールで作った反響板をそれぞれのグループに準備した。子どもたちは、まず、始めの部分と真ん中の部分までカードを並べ、「とりあえずどう聴こえるか試してみよう。」と鳴らし始めた。カードを音楽の仕組みを考えながら並べてはいるが、実際にどう聴こえるかは鳴らして初めて分かるため、繰り返すうちにカードが決まっていた。あるグループでは、「カスタネットをずらして鳴らすのが面白いから、それを中の最後にいれよう。」と、意図をもった意見が出ていた。他には「二人でひとまとまりの問いと答えにしたら、音楽がつながって聴こえてきた。」という感想をもち、音楽の仕組みを生かして、まとまりのある音楽をつくる姿も見られた。活動を初めて10分後、まだカードがはれていないグループもあったので、一度全員集合し、中の部分だけ聴き合いを行った。そこで、問いと答えを生かしたり、お気に入りの音色を際立たせたりしたグループに発表をしてもらった。演奏を聴かせた後、構成シートを見せると、「問いと答えになっている。」「同時に鳴らすところが一人違う鳴らし方をしている。」など、なぜ「よい感じ」に聴こえたか根拠をもつことができた。音楽の仕組みを生かしたグループは、より「音楽らしく」聴こえ、ただ意図無くカードを並べたグループは、なんとなく（感覚的なものとして）「音楽でない」感じを受けていた。そのため、この聴き合い活動の後、早く作り直してみたいという思いをもち、残りの時間はさらに意欲的に取り組み出した。あるグループでは、早速「終わりの部分につながることを問いと答えの答えにしたら、音楽が終わる感じになるのでは。」と途中までつくっていたカードの並びを見て、終わりの部分を決めていた。実際に試してみると、音楽がまとまって聴こえたのか「いい感じの（音楽）ができました。」と嬉しそうに言っていた。他にも、反復を使って終わりを強調する工夫や自分で考えたリズムを取り入れるなど、創意工夫が見られた（資料2）。

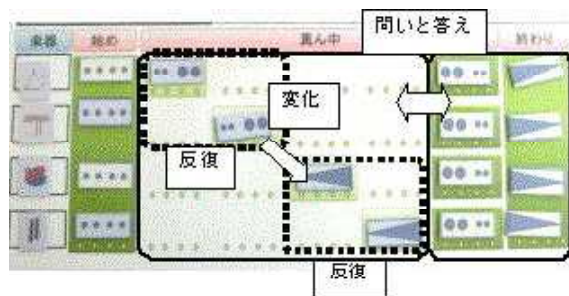
構成シート	工夫点
グループ A	



グループ B



グループ C



始めと終わりを同じリズムにして、中の部分を問いと答えで並べることで、まとまりのある音楽に聴こえた。

一人だけリズムを変えることで、音色が際立つ工夫をしている。終わりの部分をクレッシェンドで盛り上げて、終わる感じが伝わった。

中の部分を反復・変化にし、終わりの部分を迷っていたが、順につないだリズムの問いと答えを持ってきて、まとまりのある音楽に聴こえた。

【資料 2 展開段階の構成シート】

以上のことから、構成シートを使うことを通して音楽づくりを行う活動と、その間に他グループの音楽を聴く活動は有効であったと考える。その根拠としては、どのグループも意欲的に試すことを何度も繰り返している姿が見られたからである。この時、リズムカードを操作しながら自分の考えを伝える姿が見られたり、音楽の仕組みをキーワードにして話し合う姿が見られたからである。また、他のグループを聴く活動を設定する前までは、意図がなかったカードを並べたグループもあったが、聴く活動の後には、他のグループのよさを自分たちの音楽づくりに生かす姿がみられたため、効果的に働いたと考える。

そして、終末段階では、友だちの見方・考え方のよさや面白さに気づくことができることをねらいとした。そのために、互いの演奏を聴き合う活動を設定した。子どもたちは、自分たちの音楽との違いを楽しみながら聴いていた。また、自分たちの音楽を聴かせたいという思いも強く、演奏することも楽しむことができていた。学習後の児童の感想（資料 7）を見ると、素材の違いや鳴らし方の工夫による音色の特徴が表れるよさや面白さに気付いたことや自分たちでつくった音楽を演奏すること、音楽を作っていく上で意見を出し合うことにも楽しさを感じていることが分かった。

☆ ほかのグループのえんそうでおもしろかったところは
 どんなどころですか。

□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
おもしろかったところ	

☆ 音楽をグループでついたり、えんそうしたりして、
 おもしろかったことはどんなどころですか。

楽器一つでいろいろな音かきだせることかおもしろい	
楽器一つではいろいろな楽器をかきだせることがおもしろい	

☆ ほかのグループのえんそうでおもしろかったところは
 どんなどころですか。

□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
おもしろかったところ	

☆ ほかのグループのえんそうでおもしろかったところは
 どんなどころですか。

カスタネットをかわたにならして、カスタネットを2つ叩いていた。	
トイアンクルとかが音でつかれて、カスタネットを2つ叩いていた。	
持っていた。音がよく聞こえていた。カスタネットを2つ叩いて音が	
いいなにかたでつかれて。	

☆ 音楽をグループでついたり、えんそうしたりして、
 おもしろかったことはどんなどころですか。

色々な楽器をかきだせることかおもしろい	
いろいろな楽器をかきだせることがおもしろい	

☆ ほかのグループのえんそうでおもしろかったところは
 どんなどころですか。

1日目	2日目
2. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか	3. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか
3. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか	4. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか
4. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか	5. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか
5. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか	6. スズがたがたに鳴った。1音のくみあわせがなかなか
おもしろかったところ	

☆ 音楽をグループでついたり、えんそうしたりして、
 おもしろかったことはどんなどころですか。

楽器一つでいろいろな音かきだせることかおもしろい	
楽器一つではいろいろな楽器をかきだせることがおもしろい	

☆ 音楽をグループでついたり、えんそうしたりして、
 おもしろかったことはどんなどころですか。

□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
□	んのかさねよまこちるつてををたもいのがおもしろい
おもしろかったところ	

☆ ほかのグループのえんそうでおもしろかったところは
 どんなどころですか。

カスタネットをかわたにならして、カスタネットを2つ叩いていた。	
トイアンクルとかが音でつかれて、カスタネットを2つ叩いていた。	
持っていた。音がよく聞こえていた。カスタネットを2つ叩いて音が	
いいなにかたでつかれて。	

☆ 音楽をグループでついたり、えんそうしたりして、
 おもしろかったことはどんなどころですか。

色々な楽器をかきだせることかおもしろい	
いろいろな楽器をかきだせることがおもしろい	

【資料3 児童の感想】

このことから、味わう段階において、互いの演奏を聴き合う活動は有効であったと考える。資料3を見ると他のグループの演奏で面白かったこととして、素材の組み合わせの工夫や鳴らし方の工夫、音楽の仕組みの組み合わせ方を挙げている。つまり、音色が素材によって特徴があること、同じ素材であっても鳴らし方で音色が変わるこ

と、音楽の仕組みが“音楽らしさ”を生んでいることに気づき、そのよさや面白さを感じ取りながら活動することができたことが考えられる。

10 研究のまとめ

本実践において、3つの交流活動を位置付けたことは有効であったと考える。友達の見方、考え方から刺激され、新たな考えにつながった姿が見られた。また、中には、その新たな考えが生まれる「発想することそのもの」が楽しいと感じている子どももいた。さらに、音や音楽の視覚化を図ったことは、音楽活動も言語活動も活発にすることが明らかになった。思いや意図を伝える上でも、聴き取る上でも、言葉だけでは難しいところが、図化されることによって、共通の言語としてコミュニケーションを取ることができたと考える。課題としては、自分たちの音楽がどのように聴こえているか、客観的に、しかも即時的に評価できる仕組みをつくとよいと考える。タブレットの録音機能や録画機能を使えば可能であると考え。そうすることで、もっと自分たちがつくった音楽に自信をもって「聴かせたい」という思いが膨らむと考える。また、45分では最後の聴き合い活動が十分に取ることができず、10班あったうちの4班しか発表することができなかった。残りの6班の発表は次の時間に設定することになったので、1時間計画を2時間にし、この後に設定していた鑑賞の活動を2時間の終わり15分に取り入れるとよいと考える。聴き合いでもった観点を生かして、より効果的に鑑賞曲も味わうことができると思える。

11 成果と今後の課題

- 本時学習で取り上げる要素の焦点化を図る聴き比べを設定したことで、要素に着目し、音楽が表す雰囲気や曲想と関連付けながら、音楽的な見方や考え方を働かせることができた。
- 思考の枠をつくり、操作可能なシンキングツールは子どもの交流意欲だけでなく、思いや意図を表出する上でも効果的だった。
- 本研究の有効性を高めるために、検証資料を個人単位で細かく分析すること
- 交流活動の質を高めるために、タブレットの活用など、音楽と言語を即時的に往還しながらコミュニケーションできるようにすること

◎ 参考文献

- ・文部科学省 学習指導要領解説書 音楽編（現行）
- ・文部科学省 新学習指導要領解説書 音楽編
- ・ぎょうせい 平成20年度改訂 小学校教育課程講座 音楽 佐藤比呂志 坪能由起子
- ・音楽之友社 音楽づくりの授業アイデア集 高倉弘光他
- ・東洋館出版社 子どもがときめく音楽授業づくり 高倉弘光
- ・音楽之友社 子どもが活動する新しい鑑賞授業 小島律子
- ・さくら社 思考ツールを使う授業 関西大学初等部／田村 学
- ・東洋館出版社 音楽科授業論 金本 正武